普通のローマ市民らしい姿

2023年11月12日　説教「ローマ市民権に勝るもの」

使徒の働き16章35～40節

ピリピの獄舎に投獄されたパウロとシラス。獄中でも主を礼拝し、賛美をささげ、それは獄全体を明るくさせました。ところが、そこに地震が起き、看守にとっては絶望状態となりました。扉が開き、鎖が解け、囚人たちが逃げ出せる状態となったからです。彼は自害をしようとしましたが、パウロによってとどめられした。囚人たちは留まっていると伝えられて、行ってみるとそれは確かでした。彼は衝撃を受け、救いを求めます。すると「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と伝えられ、看守はキリストを信じ家族がそろってバプテスマを受けました。パウロたちにとっても、看守と家族にとってもめまぐるしい一夜でした。

１．釈放命令の伝達（35～36節）

①長官たちの命令（35）**「夜が明けると、長官たちは警吏たちを送って、『あの人たちを釈放せよ』言わせた。」**

さてその夜が明けて、長官たちは警吏たちに命令を与えました。警吏とは長官などに随伴し、犯罪の捕縛などをあたえる人でした。今ここにおいて、彼らは看守の所に行き、パウロとシラスの釈放を告げるようにとの命令を受けたのでした。

②看守の報告（36）**「そこで看守は、この命令をパウロに伝えて、『長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、使いをよこしました。どうぞ、ここを出て、ご無事に行って下さい。』」**

その命令を受けた看守はパウロに伝えます。『長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、警吏たちを通して伝えてきました。あなたがたは、これ以上のお咎めなく放免です。どうぞ、ここから出て、ご無事にお進みください。』」

２．パウロの応え（37節）

①警吏たちへの応え（37）**「ところが、パウロは、警吏たちにこう言った。『彼らは、ローマ人である私たちを、取り調べもせずに公衆の前でむち打ち、牢に入れてしまいました。』」**

しかし、パウロは警吏たちと会い、長官たちに向けての、抗議の伝言を申し伝えます。「長官たちは、ローマ市民である私たちを、取り調べ抜きで、公衆の前でむち打ちをしたばかりでなく、投獄までしたのです。」 パウロとシラスは二人ともローマ市民権を持っていました。

②長官たちへの促し（37）**「『それなのに今になって、ひそかに私たちを送り出そうとするのですか。とんでもない。彼ら自身で出向いて来て、私たちを連れ出すべきです。』」**

伝言は続きます。「それなのに、この後に及んで、それらを隠すようにし

て、私たちを秘かに出獄させようとするのですか。それは全く理に適わないことです。とんでもないことです。もし、これらのことが間違っていたということが判明したのなら、長官たち自身がやって来て、直接に私たちの出獄の任を果たすべきではありませんか。

3. パウロたちの出所（38～40節）

①長官たちへの伝言（38）**「警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人であると聞いて恐れ、」**

警吏たちたちは、パウロの言葉を持ち帰り、長官たちに報告しました。長官たちは、パウロやシラスを投獄させたことで恐れをおぼえました。というのも、パウロとシラスがローマ市民権を持つ者たちであるということを聞いたからです。長官たちもローマ市民権を持っていましたが、警吏は市民権を持っていなかった可能性もあります。であるにもかかわらず、取り調べもせずに一方的に投獄してしまったのです。このことが上に知られれば、咎めを受けることになるのではと思ったのです。

②長官たちは出向き（39）**「自分で出向いて来て、わびを言い、ふたりを外に出して、町から立ち去ってくれるように頼んだ。」**

そこで長官たちは、あわてて出向いてきて、パウロたちに詫びのことばを言い、直接に彼らを獄から外に出しました。その上で、ピリピの町から、立ち去ってくれるようにと頼んだのでした。この町で、これ以上の騒ぎを、起こさないでくれというところでしょうか。厄介者払いです。

③兄弟たちを励まし（40）**「牢を出たふたりは、ルデアの家に行った。そして、兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出て行った。」**

かくして、出獄したパウロとシラスはあのピリピの町で最初に救われた紫布の商人であるルデアの家に行きました。さすがに、看守の家は官憲の目もあったでしょうし、看守の家族への配慮もありました。また、ルデアのことも気になっていたでしょう。さらに、その家には他のクリスチャンが集まる所となっていたようなのです。そのなかには、ルカを含むパウロたちと伝道旅行をともにする者たちもいたでしょう。いずれにせよ、そこにいる兄弟たちを励まして、そこを立ち去っていきました。

《結論》

パウロはピリピ人への手紙の中でこんなことを記しています。「ただし、私は、人間的なものにおいて頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」（3:4-6）。つまり、ユダヤの民としては、誰にもひけをとらない背景を持ち、律法については「ガマリエルのもとで厳格な教育を受けた」人であり（使徒 22:3）、その遵守についても非難されるところのないと言えるほどでした。また、ピリピ書では述べていませんが、今朝の聖書箇所に出てきたように、パウロはローマの市民権を持っていました。ローマ市民権は、議会あるいは皇帝によって、富者や相当の社会的地位のある者に授けられました。また市民は投票、士官、判事の判決に反対して議会に告訴をする権利が与えられていました。ことほど左様に、パウロは地上的な面においては、申し分のない立場、身分、経歴を持っていました。神は、世界宣教の実現のために、そうしたパウロという人物を選ばれたということと言えるしょう。しかし、彼はそれを基本的には、外に出そうとはしませんでしたが、いざという時に、それを武器のように用いたのです。私たちが今朝読みましたが、長官が警吏を使いとして送ってきて、パウロとシラスを釈放させると告げた時に、いわば伝家の宝刀のようにして、ローマの市民権を用いたのです。「この紋所が目に入らぬか。この方こそ、前の副将軍水戸光圀公にあらせられるぞ。」とは少し違いますが、相手を驚かすには十分でした。ローマの市民権を持つ人を取り調べもせず、むちを打ち、投獄してしまったというのですから、長官たちもあわてました。パウロがねらったのは、「頭が高い！」とひれ伏させるためではなく、自分達が伝道していこうとするときに、それなりの敬意を払わせようとしたのです。

私どもも 43 年伝道をしてきて、社会の人々と壁を感ぜずに関わることができたことがあります。それは、幼稚園で働いていた時でした。つまり、普通何もなく、社会の人々と相接する時には、砂をかむような感触がありました。しかし、「幼稚園の牧師」「幼稚園の先生」となると、子供達の両親達は敬意を払ってくれましたし、相談をしてくる方々もいました。福音を語ったときに、警戒心を捨てて、心を開いてくださることが多くありました。パウロはその面で、伝道の地ならしのために、ローマの市民権というものを示していったのです。 「荒れし地にも花は咲き、泉はわきあふれて、四方の山に響きつつ、喜びの声すなり」（讃美歌216）とありますが、荒れた地の耕しのために、彼は市民権を一つの武器として用いたのです。

パウロはほめられようとか、高く奉られようなどと願っていたのでは決してありません。いえいえ、彼はこう言っています。「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、一切のことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています」（ピリピ3:7-8）。

パウロにとって、キリストを知ることの価値はローマの市民権やヘブル人としての様々な栄誉にまさっていたのです。それでは、あなたはどうでしょう。キリストを知ることに、どれだけの価値を見いだしていますか。世が誇る、金や栄誉をちらつかされると、ふらふらとそちらになびいてしまうことはありませんか。クリスチャンは、キリストに従っていく者たちです。また、キリストに似せられて行く者たちです。キリストのゆえに、世の誰の前でも堂々としていられる者たちなのです。聖書を通しキリストを学び、祈りを通して主としましょう。賛美を通して主キリストをほめたたえていきましょう。